

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18530486  
 研究課題名（和文） 大学研究者のキャリア発達における危機と飛躍に及ぼすサポート資源の効果に関する研究  
 研究課題名（英文） A study of crisis that researchers face in career development and effect of support resources on their thriving  
 研究代表者  
 山浦 一保 (YAMAURA KAZUHO)  
 静岡県立大学・経営情報学部・講師  
 研究者番号：80405141

研究成果の概要：本研究の目的は、若手研究者がキャリア形成する上で、どのような危機(つらい・つまずき)を経験するのか、その経験後、どのようにして飛躍(モチベーション回復)するのかを社会心理学的に明らかにすることであった。大学院生を含む若手研究者の危機的経験とその実態を浮き彫りにするとともに、これらの危機に直面した後の飛躍に有効な指導・サポート源とそのあり方に関する示唆を得た。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	480,000	2,680,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：キャリア発達、サポート資源、若手研究者、危機、モチベーション、飛躍

## 1. 研究開始当初の背景

知識基盤社会の構築を目指した大学院重点化の取り組み(ポストドクター1万人計画の施策)によって、大学院の入学者数は増加傾向にあり、専門職大学院などへの社会人入学者の増加も顕著である。大学院にとっては多様な経験や能力をもつ人材が確保され、企業や社会にとっても知識創造と人材育成を目指す上での効果が期待される。しかし、大学院の教育環境やサポート体制は十分に整っているわけではない。これは、文部科学省技術・学術審議会(2005年中間報告)が、「体系的な教育研究環境の整備」を解決課題に掲

げていることから明らかであり、大学院・若手研究者のキャリア発達を研究することは必要にして不可欠なテーマといえる。

大学院生自身は、研究上のつまずきや少人数制ゆえの難しさを経験するかもしれない。また、少子化・不景気等といった社会的状況の影響によって大学院修了者の就職率は減少傾向にあり、今後も就職(とくに大学研究者)採用時の競争は激しいと予想される。研究機関・組織では成果主義や任期制が導入され、就職後も安定した長期雇用が保障されているとは限らない。すなわち、大学院生・研究者だれにでも、思いがけずキャリア発達上

の困難や危機を経験する可能性が少なからずあるといえる。

これまでの研究では、キャリア形成過程で直面する転機・節目をいかに捉え対応するか (Shein, 1978; 金井, 2002)、節目と節目の間をいかに自律的に行動するか (Krumboltz, 1979)、あるいはその統合 (花田・宮地・大木, 2003) についての議論が展開している。しかしながら、とりわけ、キャリア発達上で直面する危機 (インパクトのある、つらい・つまずき経験) を単に克服するだけでなく、さらにポジティブな活動へ飛躍させる個人の心理的プロセスについて、体系的な実証データが乏しい現状にある。

時代や環境の変化の著しさに伴い、キャリア発達における転機・節目と、その時点での自律的なキャリアデザイン力の重要性が指摘されている。その一方で、現在、知識基盤構築や企業組織の将来の担い手である大学院生は、研究上のつまずきによる精神的健康の阻害や就職問題が深刻化している。それにも関わらず、個人の心理面の実情、この側面と社会的資源との関連については十分に理解されていない。インパクトをもつ危機的経験を通して、落ち込んだモチベーションを単に回復させるだけでなく、さらにモチベーション回復・飛躍 (thriving) するためにはどうすればよいのだろうか。

これまでに、我々は、大学研究者を対象にした調査を実施し、サポート資源獲得の様相はキャリア発達段階の時期によって異なること、キャリア形成の様相は分野別、性別によって異なることを報告した (坂田・山浦, 2000)。キャリア発達の様相にかかわりの強い分野 (理系・文系) 差や性差を考慮した研究と知見の蓄積は、未だ乏しい状況にある。

以上のことを踏まえて、本研究では、質的・量的データから臨床場面に寄与する基礎的資料の提供、特に、効果的なサポート資源提供のあり方、大学院の研究環境や外部機関を含めた社会的・臨床的支援体制への方策提案に向けて着手するものである。また、データ収集にあたっては、30歳代までの研究者 (以下、若手研究者と呼ぶ) を中心対象とし、これらそれぞれの比較検討を試みる。

## 2. 研究の目的

本研究が明らかにしようとする点は、次の3点に集約できる。

- (1) 危機内容の質的把握：若手研究者は、どのような危機を経験することがあるのか。その背景にはどのような要因が関わっているのか。
- (2) 危機からの飛躍とサポート資源との関連：彼らが危機を経験したとき、どのようなサポート資源を活用することによって、この危機を克服し、さらに飛躍できるのか。

- (3) 飛躍に至る心理プロセスの解明：上述した(2)の根底に、いかなる心理プロセスが存在するのか。

これらの解明を試みるため、以下のとおり調査を実施した。

## 3. 研究の方法

### (1) 第1段階：インタビュー調査

まず、若手研究者が経験した危機と、その際のサポート資源の内容について探索的に検討するためのインタビュー調査を実施した。サポート資源に関する内容については、次段階の質問紙調査の項目に反映させた。

研究に関するパフォーマンスの好調-不調のバイオリズムを記入してもらい、それをもとに1人あたり1時間程度の半構造化面接を行った。分野別にそれぞれ20名ずつを対象にデータを収集した (表1)。

表1 インタビュー調査の協力者属性

	理系 (n=20)	文系 (n=20)
平均年齢:歳	32.7 (SD=3.1)	33.0 (SD=2.7)
准教授	3 (15.0%)	7 (35.0%)
講師	2 (10.0%)	11 (55.0%)
助教・助手	6 (30.0%)	0 (0.0%)
研究員	7 (35.0%)	2 (10.0%)
大学院生	2 (10.0%)	0 (0.0%)
男性 (既婚者)	13 (6)	11 (6)
女性 (既婚者)	7 (3)	9 (2)
国立	13 (65.0%)	9 (45.0%)
公立	1 (5.0%)	0 (0.0%)
私立	0 (0.0%)	9 (45.0%)
研究所	6 (30.0%)	2 (10.0%)

### (2) 第2段階：質問紙調査

インタビュー調査で得られた質的データの分析結果を基に、次の段階では質問紙 (web) 調査を行った。ここでの目的は、危機的経験後での心理的な落ち込みから飛躍に至るプロセスを明らかにすることである。ここで言う飛躍とは、落ち込む前のモチベーション水準からの回復、およびそれ以上の水準になることを指す。対人的資源 (ソーシャル・サポート) に注目して調査を計画した。

①実施時期：2009年3月。

②質問紙の主な内容構成：上述の目的の分析に直接関係する質問項目は、以下のとおりである (いずれの尺度も5段階評定)。

- ・危機的経験の内容：最も印象的な「つらい・つまずき経験」を一つ挙げ、自由記述式で記入してもらった。
- ・経験から立ち直った後の心理的反応：Tedeschi & Calhoun (1996) の Posttraumatic Growth Inventory、安藤・松井・福岡 (2004) を参考に作成した (山浦・塩谷, 2008)。
- ・ソーシャル・サポートの享受度：経験当時から立ち直るまでに受けたサポートについてたずねた。サポート源には、a. 実質上の指導教員、b. 同じ大学院で同じ研究室仲間 (先輩～後輩)、c. 同じ大学院だが違う研

研究室の教員、d. 同じ大学院だが違う研究室の仲間、e. 国内研究者、f. 国外研究者、g. 異分野の研究者、h. その他(家族など)の8種類を挙げた。

危機的経験から立ち直る際の貢献度を全体が100%になるように答えてもらった。また、貢献してくれた人から受けたソーシャル・サポートの内容とその程度についての回答も求めた。これは、小牧・田中(1996)を参考に、6項目を設定した。

サポート源の a. と b. を同研究室内、c. ~g. 研究室外、h. を家族他として3分類した。それぞれのサポート得点の合計を算出して分析に用いた。

- ・現在のモチベーションの程度：三隅(1984)を参考に7項目を作成し、経験当時を比較基準にして答えてもらった。

この他、現在の状態(気分等)を把握するため、以下の項目を設定した。

- ・現在の気分：気分プロフィール検査(POMS；横山・下光・野村，2002)：「抑うつ・落ち込み」「活気」「緊張・不安」について、短縮版で用いられている5項目を採用した。
- ・属性：大学院時代の分野、性別、年齢、現在の立場など。
- ③調査対象者：1,181名からの回答を得た。属性は表2のとおりである。

表2 質問紙(web)調査の協力者属性

	大学院時代に 危機経験(完全回答)	
	全対象者 (N=1,181)	(N=896)
平均年齢:歳	31.9 (SD=4.4)	31.4 (SD=4.4)
理系		
男性	425 (36.0%)	306 (34.2%)
女性	247 (20.9%)	197 (22.0%)
文系		
男性	265 (22.4%)	188 (21.0%)
女性	244 (20.7%)	205 (22.9%)
現在		
大学院生	224	206
うち男性	112	102
研究職者	287	161
うち男性	168	73
非研究職者	670	373

#### 4. 研究成果

##### (1) 大学院時代の危機的経験

インタビューで得られた内容について質的分析を行った。その結果をもとに、Web調査で得られた記述内容を分類した(表3)。

質問紙(web)調査では、大学院生以外の回答者もあり、“大学院から現在までの研究生活上で、最も印象的なつらい・つまずき(危機的)経験”を一つ思い出してもらった。その結果、最も印象的な危機を経験した時期に大学院時代を挙げたのは、現役大学院生224名のうち213名(95.1%；他、経験なし4名、社会人院生など7名は研究職時代や非研究職時代を記入)が、現在大学・その他の研究機関の研究職者287名のうち168名(58.5%；経験なし4名、研究職時代106名、非研究職時代9名)が、そして現在非研究職者670名のうち554名(82.7%；他、経験なし9名、研

究職時代26名、非研究職時代81名)であった。これは、大学院時代の過ごし方、危機の乗り切り方が、その後の進路を左右することを示唆していると言える。

表3 危機(つらい・つまずき)経験：完全回答者のみ

質問紙(web)調査のデータ	大学院時代に経験				現役院生	
	理系出身		文系出身		理系	文系
	男性	女性	男性	女性		
インタビューに基づく ↓カテゴリー (N) (言及数)	(310) (345)	(200) (235)	(194) (213)	(207) (243)	(79) (87)	(124) (142)
1. 研究関連	215 (69.4%)	119 (59.5%)	118 (60.8%)	116 (56.0%)	48 (60.8%)	62 (50.0%)
①テーマ設定・方向性、進捗	208	108	112	94	46	58
②留学	2	2	4	13	1	1
③研究+αの両立	5	9	2	9	1	3
2. 対人関連	89 (28.7%)	91 (45.5%)	51 (26.3%)	85 (41.1%)	28 (35.4%)	49 (39.5%)
①トラブル、指導のあり方	76	77	44	78	22	45
②院、研究室システム上の問題 (上記2.①以外)	13	14	7	7	6	4
3. 将来・進路関連	18 (5.8%)	13 (6.5%)	21 (10.8%)	18 (8.7%)	5 (6.3%)	13 (10.5%)
①将来不安	7	1	10	7	0	6
②進路、就職活動の悩み	11	12	11	11	5	7
4. 経済面	3 (1.0%)	0 (0.0%)	2 (1.0%)	2 (1.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
5. 体調面、その他	16 (5.2%)	9 (4.5%)	15 (7.7%)	20 (10.0%)	4 (5.0%)	16 (12.9%)
6. 特になし	4 (1.3%)	3 (1.5%)	6 (3.1%)	2 (1.0%)	2 (2.5%)	2 (1.6%)
※つらさの程度(他を上回るつらさ)	130 (41.9%)	100 (50.0%)	83 (42.8%)	100 (48.3%)	40 (50.6%)	53 (42.7%)

注1:表中の(%)は、「理系文系×男女」の別ごとの人数に占める割合。

注2:言及数は、経験内容が複合的ゆえ実際の人数よりも多い。

注3:つらさの程度は、「3.他の苦難をやや上回る」「4.他の苦難をはるかに上回る」

「5.それまでに経験したことのない酷いつらさ」の該当者数(%)。

ここで、大学院時代に危機的経験をした896名(他項目についても完全回答者)に限って、以下の分析を行った。なお、ここに挙げた内容について、他の苦難を上回ると回答したのは約半数であった(表3の下)。

まず、最も印象に残っている危機的経験のうち、その半数以上の人々が挙げたのは「研究関連」であった。より詳細にみると、研究進捗・成果が出なかったこと、能力不足・期待に応えられなかったこと、研究の方向性が分からずテーマが決まらなかったこと、の順で多かった。この他に、自分の研究の意義に対する疑念に関する事柄なども挙げた。研究関連の危機については、理系あるいは男性の言及が多く見られた。この危機に分類された具体的な内容は、以下のとおりである(分野・性別・現在研究職か否か；以下同様)。

- ・“毎日データの出ない同じ作業の繰り返して、得るものが見えてこなかった。”(理系・男性・研究職)
- ・“自分の能力が教授が求めてくる能力まで達しない。”(文系・女性・研究職)
- ・“研究したいことと、社会の中で役立つことのギャップがあり、何を勉強したらいいのかわからなくなった。”(理系・男性・非研究者)
- ・“留学中、ネイティブの人と対等に競争を

しなくてはいけなかったとき。”(文系・女性・研究職)

- ・“初学会と国家資格試験 2 つが全て重なった。。。”(理系・男性・非研究職)

ついで多かったのは、「対人関連」であった。これには、教育・指導のあり方、その他の対人的トラブル(各種ハラスメント)が含まれた。指導教員をはじめ、同じ分野や講座の教員との関係が大半を占めた(対人関係に言及した者のうち、教員絡みの内容であったのは、理系男性 74.0%、文系男性 72.3%、理系女性 72.3%、文系女性 85.0%)。

- ・“実験がうまくいかず、指導教官に怒られ、次第に何をやっても怒られるようになった。実験でわからないことを相談しても結局は怒られる始末。学会前は特に酷かった。始発・終電の毎日、大学にいる時間の1/3はお説教だった。人格まで否定され、ボロボロだった。”(文系・男性・非研究職)
- ・“研究関係で大きな結果を残したため、まったく師弟関係のない大学教員からアカハラを受けた。そのため、私はうつ病になり、現在においてもうつ病の障害者手帳を交付されています。”(文系・男性・非研究職)
- ・“人間としての根本的な考え方にも距離があったので・・・博士号の審査直前に結論をひっくり返されたときには、心からにくいと思った。そのときの気持ちが一番つらかった。”(理系・男性・研究職)
- ・“指導教員による理不尽な留年決定等”。(文系・男性・研究職)
- ・“中間発表の時、沢山のオーディエンスの前で指導教官に見捨てられた。”(文系・女性・研究職)
- ・“フィールド先での人間関係がうまくいかず、調査に支障をきたした事。”(文系・女性・研究職)
- ・“他大学からの進学で、研究室の環境に馴染めなかった。”(文系・男性・非研究職)

さらに、大学院の出口管理の問題を反映して、「将来・就職」に関する不安に襲われていた(いる)状態が浮き彫りになった。

- ・“知り合いが大学を離れて就職していくこと、先が見えない不安感。”(理系・男性・研究職)
- ・“就職先も非常勤職さえもなく、博士課程も満期になって、この先の人生どうなるかと不安だった。国の政策もあり博士課程の増員だけを進め、就職先のことをもっと社会的に考えて欲しいと思った。”(文系・男

性・研究職)

- ・“就職先がなかなか決まらず、また、研究者としての適性についても問題を感じていて、将来が見えなくなった。”(理系・女性・非研究職)

これらの経験は、それぞれに相互関連して複合的に生じていた。加えて、両調査の回答の中には、うつ病の発症・悪化、自殺念慮・企図者も少なからず存在し、看過できない結果と思われる。

- ・“・・・(中略)・・・みんな社会人として頑張っているのに、私はまだ学生だ。と、かなり頑張るが、自分がどれくらい頑張ったのか、ものさしがわからず、研究を頑張りすぎて、拒食症になり、子が産めないと言われた体になった。”(理系・女性・非研究職)
- ・“博士論文の執筆が滞り、鬱病になってしまったこと。”(文系・男性・研究職)
- ・“大学院にて同期であった年上の学生(女性)からの度重なる干渉。なにをするにも保護者面であれこれと指図するなど、精神的にかなり追い込まれ、体調を崩し、病院に通うようになって、教員の図らいで指導を別々にうけることとなって、なんとか論文を書きあげるまでにいたった。今思い出しても不愉快な記憶です。”(文系・男性・非研究職)
- ・“就職活動をしたいが、教授が活動に否定的だったこと。”(理系・女性・非研究職)

## (2) 危機的経験後の心理的反応

山浦・塩谷(2008)は、企業に勤める社会人を対象に、仕事上の危機を経験した後の心理的反応について調査を行い、22項目から成る尺度を作成した。この尺度は、「新しい可能性の発見」「否定的な社会観と意欲減退」「人生の価値の目覚め」「関係性の再認識」の4因子から構成されるものであった。本研究では、先行研究による22項目に、インタビュー調査で得られた内容(研究者としてのアイデンティティ再構築ークライシスなどの心理的反応)も加味して、38項目を設定した。

質問紙調査によるデータを用いて因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。因子負荷量.40以上を基準に、複数の因子に負荷量の高かった6項目を削除した。再度同様の分析を行った結果、5因子を抽出した。山浦・塩谷(2008)とほぼ同様の4因子が得られたことに加えて、「研究者アイデンティティの再構築」の因子が見出された。いずれの因子も内的一貫性は十分に高く、累積寄与率は56.49%であった。表4には、各因子の具

体的な項目について、因子負荷量が高く負荷した3項目を示す。

表4 経験後の心理的反応 (N=1,119;完全回答者総数)

<b>I. 新しい可能性の発見 (<math>\alpha=.92</math>;M=30.23, SD=8.08; 9項目)</b>	
5	困難にも立ち向かっていけると思うようになった
2	自分がひとまわり大きくなったような気がした
1	自分に自信がもてるようになった
<b>II. 関係性の再認識 (<math>\alpha=.89</math>;M=20.47, SD=2.96; 7項目)</b>	
19	人のやさしさや温かさを感じるようになった
21	困ったときには頼れる人がいることが分かった
20	よりよい人間関係を築こうと努力するようになった
<b>III. 否定的な社会観 (<math>\alpha=.85</math>;M=17.54, SD=5.93; 7項目)</b>	
10	以前ほどには努力や善行が意味あるものと思えなくなった
8	世の中は理不尽だと感じるようになった
11	人間の醜さや邪悪さを感じるようになった
<b>IV. 研究者アイデンティティの再構築 (<math>\alpha=.84</math>;M=13.01, SD=4.17; 5項目)</b>	
29	新しい研究テーマを自分で設定し進める自信がついた
28	自分の仕事は研究職しかないと思うようになった
26	自分の研究テーマが明確になり、自分の中でぶれなくなった
<b>V. 人生の価値の目覚め (<math>\alpha=.87</math>;M=10.66, SD=3.55; 4項目)</b>	
16	一日一日を大切に過ごすようになった
17	自分の人生をよりよくしていけると思えるようになった
15	人生で何が自分にとって本当に大切なことなのか分かった

表5 経験後の心理的反応：平均値(標準偏差)

	理系出身		文系出身		主効果 F(1, 892)		
	(人数)	男性(306)	女性(197)	男性(188)	女性(205)	分野別	性別
I.可能性		3.30(.83)	3.30(1.01)	3.40(.87)	3.46(.89)	4.46*	.33
II.関係性		2.85(.78)	2.91(.93)	2.96(.85)	3.07(.88)	5.28*	2.15
III.否定的		2.40(.81)	2.47(.92)	2.48(.85)	2.44(.82)	.26	.05
IV.アイデンティティ		2.56(.74)	2.35(.89)	2.73(.81)	2.70(.87)	21.33***	4.54*
V.人生価値		2.52(.78)	2.57(1.01)	2.78(.84)	2.85(.91)	20.36***	.98

注:人数は完全回答者数。1項目あたり換算、得点範囲:1~5点。交互作用効果はいずれもns.

各因子の合計得点について分野別×性別の2要因分散分析を行った(表5右側)。文系出身者は、理系出身者よりも新しい可能性を見出し、人間関係のありがたさや人生の価値を再認識し、研究者としてのアイデンティティを再構築する程度が高かった。また、研究者アイデンティティの再構築の程度は、女性よりも男性の方が統計的に有意に高かった。

### (3) 危機的経験から飛躍に至るプロセス

#### ① ソーシャル・サポート源と貢献度

危機的経験から立ち直るとき、貢献してくれた人とその程度を0~100%でたずねた。その平均値を図1に示す。家族などの私的関係による貢献度がもっとも高く、同じ研究室の仲間、指導教員の順で続いた。

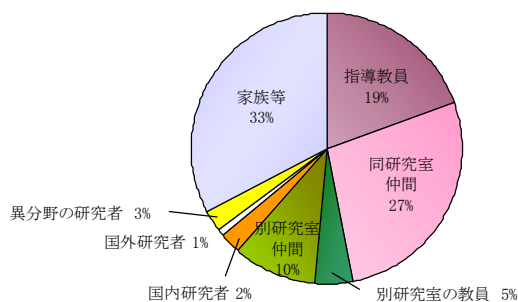


図1 サポート源と貢献度 (%)

インタビュー調査からも、家族のサポート、および“良好な関係を築いている”教員からの指導・サポートについて報告されていた。特に、教員の効果的な指導のあり方について、インタビュー協力者の発言内容に共通していた点は、定期的な接触、研究の方向づけや示唆、質問に対する適切なアドバイス、共同研究や教員の仕事への参加といった道具的サポートに関する内容、および就職を含めた相談事に対する親身な姿勢、静かな応援といった情緒的サポートに関する内容が報告された。

同時に、学生側にも、定期的な接触(接触できる関係の形成)を行う努力、同じ研究室内では十分でない面を他の対人的ネットワークの中で補う工夫が見られた。

#### ② 危機から飛躍に至る際のソーシャル・サポートの効果とその心理プロセス

経験後の心理的反応の様相は、性別、そして特に分野によって異なったため、それぞれの別で共分散構造分析を行った(図2-1, 図2-2)。経験後の心理的反応について、III. 否定的な社会観の因子以外は、それぞれの間に強い相関関係が示されている(.60~.71)。そこで、分析にあたっては、これらの顕在変数の変動を説明する潜在変数として「肯定的な再認識」という上位概念を設定することとした。これにより、多重共線性の問題は回避できるものと考えた。

分析の結果、女性は文系の傾向と、男性は理系の傾向とそれぞれ酷似しており、以下に併記していく。

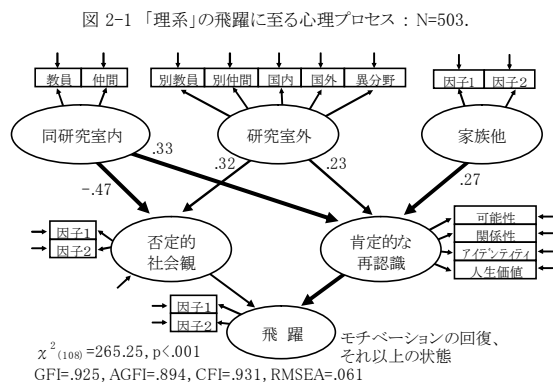
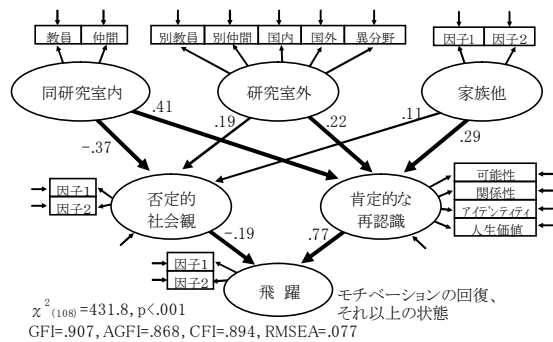
若手研究者が危機から飛躍するのは、ソーシャル・サポートによって自分の新しい可能性を発見し、研究者としてのアイデンティティを高めるなど、自他を肯定的に再認識し、社会に対する否定的な認識を抑制することができたときであった。

ただし、これらの望ましい心理的反応を引き出さるサポート源は、理系・文系および性別を問わず、同研究室の内部(指導教員、同じ研究室仲間)であった。このサポートは、肯定的な再認識を促し、否定的な認識を抑制するのに効果的であった。他方、同じ大学院だが別の研究室の教員や仲間、国内・外の学会メンバーなど、所属研究室以外からのサポートは、肯定的な認識を促すと同時に、否定的な社会観も高めることが示された。その他、家族などからのサポートは、分野・男女の別によってその効果が異なった。危機に直面した理系および男性の若手研究者の場合、家族からのサポートが、ポジティブに作用する側



面をもつ一方で、社会に対する否定的な認識を促す側面も併せ持つことが示された。他方、文系および女性の若手研究者については、否定的な認識との関連は見出されなかった。

以上の結果から、ネガティブな効果が及ぶ可能性を最小限にするには、同じ研究室の教員や仲間との関係を良好に築くことが最も効果的であると考えられる。ただし、先の結果(1)および(3)①で示したとおり、指導教員は、ケースによっては大学院での危機的経験の関係者であり、サポート提供者でもある。経験内容とサポート源、その効果に関する詳細な分析は今後の課題である。



### (3) 大学院生の現状

最後に、大学院時代に危機を経験した現役大学院生を対象に、現在(調査実施前1週間)の気分(POMSの3側面)に関する状態を調べた。有給者や非研究職者は、現在所属している組織等の要因の影響を少なからず受けている可能性があるため、ここでは現役大学院生のみ絞った。

その結果、「抑うつ・落ち込み」の側面においてのみ有意な交互作用効果が見出された( $F(1, 195)=5.70, p<.05$ )。全体的にみると、尺度の中央値は15点であり、いずれの群も低かった。中でも、理系の男性や文系の女性は、理系の女性よりも抑うつ・落ち込みの得点が有意に高く、留意しておく必要がある群と言えるかもしれない。

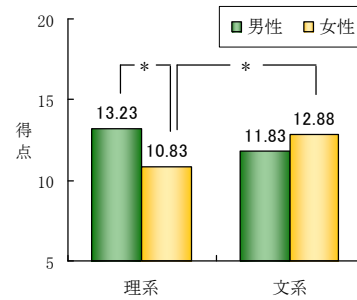


図3 現役大学院生の「抑うつ・落ち込み」 \* $p<.05$

※つらい・つまづき経験を思い起こし、そのことに関する調査にご理解とご協力をいただきました方々に、深く感謝申し上げます。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 4件)

- ① Kazuho Yamaura, Kiriko Sakata, & Kimiaki Nishida The study on social support network to accelerate thriving from career crisis: In the case of researchers at early career developmental stage. X X I X International Congress of Psychology. 2008年7月23日, Berlin, GERMANY.
- ② 山浦一保・塩谷大樹 仕事上のネガティブ経験における仕事意欲の回復プロセスの検討. 日本グループ・ダイナミクス学会, 2008年6月15日, 広島大学.
- ③ 坂田桐子 ワークショップ(WS073: 若手研究者のキャリア発達とその課題) 話題提供: 女性の若手研究者のキャリア形成. 日本心理学会, 2006年11月4日, 九州大学.
- ④ 山浦一保 ワークショップ(WS073: 若手研究者のキャリア発達とその課題) 話題提供: 大学院生の実態を統計データと面接調査から探る. 日本心理学会, 2006年11月4日, 九州大学.

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

山浦 一保 (YAMAURA KAZUHO)  
 静岡県立大学・経営情報学部・講師  
 研究者番号: 80405141

#### (2) 研究分担者

坂田 桐子 (SAKATA KIRIKO)  
 広島大学・総合科学研究科・准教授  
 研究者番号: 00235152  
 西田 公昭 (NISHIDA KIMIAKI)  
 静岡県立大学・看護学部・准教授  
 研究者番号: 10237703